

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 296 回 旅館業・日本の文化を見捨ててはならない！

2009.2.1

「人気温泉旅館ホテル 250 選・にっぽんの温泉 100 選」の認定証授与式に、来賓として招待されたので、参列してきた。これは、観光業界最大手の業界新聞「観光経済新聞社」が主催し、国観連、日観連、JNTO等観光関連9団体が後援するランキングイベント。プロ(航空、JR等のキャリア・旅行者等)の人気投票で、今回で22回目を向かえた、年に1回の、業界最大のイベントである。

二階俊博経済産業大臣はじめ、国会議員・観光庁の官僚、観光関連団体、そして全国から選ばれたホテル旅館経営者等々で約350名、会場からあふれ出るほどの賑わいであった。

昨年10月、待望の「観光庁」が発足、観光は21世紀のリーディング産業として、国を挙げた国家戦略として位置づけられた。今年こそ「観光元年」とばかり意気込むこの業界は、「観光立国JAPAN」づくりに向けて、熱く、熱く動き出したところである。

しかしながら、その意気込みとは裏腹に、観光産業の実体経済はまだまだ、厳しい状況にある。特に旅館業を取り巻く経営環境は、継続的な原材料費の高騰、万年の人手不足と、なんら問題は解消されていない。巨額な設備投資が使命的な業種、この、固定費のウエイトが大きい装置産業である旅館業は、したがって、旅行動態の変化にスピード感を持って対応できず、新たな付加価値を創出されないまま、来客数の低迷に何年も悩み続けているのが実態である。

少し前まで、外資系に支えられたバブル投資家が旅館業をターゲットにM&Aを繰り返してきた。そのやり方は、むしろ強引な乗っ取りといった感が否めない。リーマンショック後はその勢いも終息し、今は生き残った数社の乗っ取り屋が、虎視眈々と獲物を狙っている。無責任、無節操なマスコミは彼らを「事業再生のプロ」と称し、面白がって煽っている。

歴史と伝統を踏まえた、我国文化を代表する旅館業、その貴重な産業に、彼らは何の付加価値を築いてきただろうか？瀕死の旅館を無常なまでにたたき、驚くべき廉価で経営権を取得する。従業員は全員解雇、どうしても働きたいのなら再雇用してやる。ただし賃金は今までの半分。買い取った旅館は、「2時間カニ食べ放題」の安売りを展開し、見た目だけのキンキラキンの安普請で設備投資を繰り返す。それはあたかも、撮影専門の大道具・映画村を見るかのようである。

昔の旅館は文化の香りに満ち満ちていた。宿の亭主は、いかなる文人墨客とも、対等に話ができた。そう、旅館の親父は地域で間違いなく最高の文化人だった。そんな旅館に憧れて、嫁入り前のうら若きご息女を、礼儀作法といったわりの心を会得させるために、婚姻前に旅館へ預け、修行をさせた。

客室の投資額とほぼ同額を庭造りに投入した。だから何とも言えない癒しの空間が醸し出される。座卓、食卓には惜しげなく輪島塗を施し、さりげなく掛かっている掛け軸、食事の食器の数々は、いずれも美術館並み、何としてもかなわない...そんなオーラが漂っていた。

乗っ取り屋の彼らが、今、この貴重な文化をぶち壊そうとしている。儲け主義に立脚した経営は、ゆとりや余裕、つまり、精神的情緒さを醸し出す、文化的投資は無駄とする。品位も品格もない、まるで無教養な商品をラインアップし、それなりの顧客層をターゲットとする手法は、量と効率の掛け算で、かつての旅館としての「哲学」はどこにも見出すことができない。

日本の伝統文化がまたひとつ、消えようとしている。こんな事をいつまでも許す訳にはいかない。特に、自称：「繁盛旅館の仕掛け人」たる私にとって！！今日もまた、怒っているのだ。